

# 「犬身」



犬身 (上巻) 朝日文庫 337頁  
著者/松浦理英子  
朝日新聞出版 ¥651  
発行/2010年9月  
ISBN/ 9784022645647

犬身 (下巻) 朝日文庫 294頁  
著者/松浦理英子  
朝日新聞出版 ¥630  
発行/2010年9月  
ISBN/9784022645654



八束房恵は朱尾献との魂渡契約によって、犬に姿を変え、念願であった玉石梓の愛犬になることが出来ました。しかし玉石家の家族関係は愛憎渦巻く魑魅魍魎が住む世界でした。兄の彬と失踪したその妻佐也子の関係、彬を偏愛する母親と韓国ゴルフツアーに出かけたまま音信不通になった父親、梓に性的虐待をし続ける彬、そんな家族の中で、犬に姿を変えた「フサ」は懸命に梓を守ろうとします。克明な性的描写が続く中で、梓とフサとの触れ合いを描写した場面は、房恵が犬になりたかった理由もさもありなんと思わせてくれる柔らかなタッチで描かれています。「向かい合わせに横たわった梓に首筋や頬を撫でられるとフサも優しい行為を返したくなって、梓の顔に向かって舌を伸ばし唇でも鼻でも触れた所を軽くちろちろと舐めた。梓はくすぐったそうに首をすくめもしたが、表情はいちだんと甘くなり、指先でフサの毛を掻きまわしたり毛の流れに沿ってとかしたりもした。」

・中略・

寝息をたてる梓の白い顔を見下ろすとともかわいそうになって、額に前脚を置き撫でるかわりに肉球でそっと押しした。」

犬に姿を変えたフサは人間

とは会話することは出来なくなるのですが、朱尾とだけは夢の中で会話をし、意志疎通ができる設定になっています。朱尾が申し出た魂売買契約とは、「魂をいただくのは、あなたと犬として幸せな生涯をまっとうした場合に限ったこととします。不幸せだった場合は、どうぞそのまま成仏して下さい」というもので、「もしあなたが犬になった後玉石梓に性的欲求を覚えたら、生まれて何年であろうともあなたの犬としての寿命はそこで尽きます。」

魂はもろろんわたしのものです。」という条件が付いていました。その朱尾はフサや梓や彬の気持を弄ぶかのように、あるいは玉石家を破滅へ導くかのように、様々な布石を打ち始めます。

彬が父親の失踪後、経営を引き継いだホテルにBAR天狼を移転し、内部から彬を破滅に導く計画を始めます。彬の倒錯性も次第にエスカレートし「兄きたりなば」というプログ上で兄との性的関係をあたかも梓が告白しているかのような文体で書き連ねます。兄の性的虐待と兄を偏愛する母親とその母親の支配から逃れられない梓は臨界点に達し、ついに梓と彬と母親が対峙する場面を迎えることとなります。その結末と巻き込まれたフサの運命や如何に？

複雑がいっぱい張られているような気がしたのですが、小生としては「あっけないね」という思いに尽きる結末で、解説文を読んで、さらに読書力不足を感じる次第となりました。